



命の尊さについて考える夏休みに！

夏休み明けに懸念されるのが子どもの自殺。

県内でもいじめが原因ではないかと思われる自殺をはじめ、学校生活や様々な事情、要因から子どもが自殺に追い込まれる事件が後を絶ちません。

子どもの自殺事件が発生すると、「自殺した子どもの心が弱かったからだ」と、さも自殺した子の側の「心の弱さ」に要因があったかのように受け取る向きもあります。

しかし、最愛の子どもを自殺で失った遺族にしてみると、ただでさえ耐え難い悲しみに沈んでいるのに、その心情に追い打ちをかけるような無責任な考えではないでしょうか。

今の時代、いじめが原因で自殺を選択するしかなかった子どもと同じ境地に立たされると、誰でも「もう死んでしまいたい」と追い詰められると思われます。心が弱かったからではなく、誰にもSOSを発信できず、誰からも心のSOSに気付いてもらえず、救いの手を差し伸べてもらえなかった。——悩みに悩み、苦しんで苦しみぬいて、その果てに自死を選択するしかなかったのではないのでしょうか……。

周囲の大人が追い詰められている子の異変に気づき、「何か悩みがあるんじゃないの……？」と話しかけ、優しく寄り添い、いじめ等が疑われたら、家庭と学校が連携して事実関係を早急に調べ、その解決に向けた有効な手だてを講じてさえいれば、死を選択するようなことは決してなかったのかもしれない。

夏休み明け、自殺に追い込まれるような子どもを出さないためには、自殺に追い込まれるぐらい辛く苦しい思いをしている子どもの異変にできるだけ早く気づき、寄り添い、悩みを聴きとり、有効な手だてを講じていくことこそが求められるのではないのでしょうか。

無念の自殺に追い込まれた子に要因を求めているのは、同じ悲劇が繰り返されるだけだと深く肝に銘じたいものです。

なお、家庭では、何より「命の尊さ」を繰り返し繰り返し説くことが重要です。

夏休みは、「命の尊さ」について家族で語り合うよい機会です。

お盆のお墓参り等の際、「命が先祖から代々受け継がれて今ここに自分が存在する」という「命のバトンパス」について語り継ぐまたとない機会と思われます。

その際、「子どもは親の宝」であり、子どもが先に逝くと親がいかに悲しむかを伝えたり、いじめの加害者になって相手の子を追い詰めてしまうと自殺事案に発展しかねないことを伝えたりして、「命の尊さ」を具体的に説いていただけたらと願います。

